

ISSN 0910-2396

# 野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第156号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成21年6月21日

タゲリ



2009. 3. 29 当別川・石狩川合流点付近

撮影者 坂井 伍一 (札幌市手稲区)



も く じ

私の探鳥地(56) エルフィンロード (札幌市・北広島市境界)  
 札幌市厚別区 畑 正輔 ..... 2

北海道大学構内で観察されたコベニヒワ  
 北海道大学低温研究所 南波 興之 ..... 3

札幌市豊平公園でナキイスカ 広 報 部 ..... 4

ウトウという名の鳥 札幌市中央区 武沢 和義 ..... 5

絶滅危惧種シマアオジをどう守るか(3)  
シマアオジ  
 鳥の棲む風景とは?  
 北海道環境科学研究センター自然環境部 玉田 克巳 ..... 8

探鳥地紹介 いしかり調整池 広 報 部 ..... 10

平成21年度総会報告 ..... 11

探鳥会ほうこく ..... 13

探鳥会あんない ..... 16

鳥 民 だ よ り ..... 16

私の探鳥地 (56) エルフィンロード (札幌市・北広島市境界)

札幌市厚別区 畑 正 輔

森の妖精エルフィンの名前が付けられた、厚別上野幌から北広島までのサイクリングロード(下図)が、雪解けから降雪時期までの私の探鳥地です。札幌市と北広島市の境界のこの場所は、市街地グリーンベルトとなっており、中には幾つかの散策路(遊歩道)があります。旧千歳線(JR)の線路跡地を整備したもので、所々に営農民家が点在するものの、大部分が自然林で残っており、並行して走るJRの騒音を除けば、深い森の中のような感覚を覚えます。そしてここは、鉄道の撮影スポットでもあり、時刻表を片手にカメラを構えている姿を見掛けます。

当初は、単なるサイクリングの為に、10年ほど前から暇を見つけては行っておりましたが、探鳥会入会を機会に、探鳥が目的になりました。ロード沿いを自転車で、数箇所の散策路内を徒歩で、朝8時頃から3時間程度探鳥するということがパターンとなっています(休日は、ランナー・自転車などで混雑するため遠慮しています)。上野幌側か

ら入り、図中の水辺の広場までを往復していますが、季節ごとに主に森の鳥を堪能することが出来ます。そんなに珍しい鳥がいる訳ではありませんが、我が家から自転車で数分の距離なので格好の場所として、楽しんでおります。

(主な鳥たち)カラ類・キツツキ類・カッコウ・ツツドリ・レンジャク類・キクイタダキ・ヤブサメ・ウグイス・センダイムシクイ・ノビタキ・ツグミ・クロツグミ・キビタキ・コサメビタキ・オオルリ・キバシリ・メジロ・ウソ・イカルなど。

一度だけ、朝帰り(?)のフクロウを目撃しました! 蝦夷サンショウウオも毎年、産卵しています。アカゲラ・ゴジュウカラなどが、毎年数箇所です営巣しています。このロードの真ん中に、近年自転車の駅が新設され、駅常備のレンタサイクル(有料)で、楽しむ親子連れも多く見かけるようになりました。



## 北海道大学構内で観察されたコベニヒワ

北海道大学低温研究所 南波 興之

2008～2009年にかけての冬は非常にベニヒワの多い年となった。北海道大学構内でもベニヒワの群が観察され、特に低温科学研究所（以下、低温研）から獣医学部にかけてのシラカバ並木周辺ではほぼ毎日のようにベニヒワの群が観察された。そして、その群の中からコベニヒワを見つけたので報告する。

筆者は低温研の研究室に普段いるのだが、ベニヒワの群が低温研周辺にいることを確認してから、天気がいい日の昼休みは15分か30分程度、双眼鏡とカメラを持ってベニヒワやマヒワなどの観察や撮影を行っていた。ベニヒワの群はシラカバにとまり、実を食べていたが、2月中旬になると木の上にある実がなくなってしまったのか、地面に降りて採餌を始めた。地面にはまだ雪が残っていたが、雪が解けて地面が露出したところにベニヒワの群が舞い降りて落ちているシラカバの実を一生懸命ついでいた。地面が露出している場所が少ないため、ベニヒワたちはその場所に固執して車が通ると逃げるが、すぐそこに舞い戻ってエサをついばみ続け、人が近づいてもギリギリまで逃げる事がなかった。そこで筆者は、ギリギリまでベニヒワの群に近づいて撮影を行い、うまく撮れた写真のいくつかをインターネット上にアップロードしていた。その写真の中にコベニヒワと疑わしき写真を見つけた（写真1）。これは、2月20日に撮影した6羽の群の1羽なのだが、明らかに他の個体より全体が白く、クチバシが小さめであったので、まずコベニヒワに違いないだろうということになった。その後、この写真を見た北海道大学野鳥研究会の有志で、低温研周辺にてこのコベニヒワとおぼしき個体の観察、撮影が続けられた。コベニヒワの特徴として、1. 嘴は小さい。2. 腰と下尾筒は白い（写真2、写真3）。3. 脇の縦斑



写真1

は非常に少ない。4. 全体的に白っぽい体色。5. 額の赤は狭い。が挙げられる（渡辺・三河, 2004）。その結果、観察個体が図鑑通りの特徴を有していたことからコベニヒワだと断定した。さらにその後の観察でコベニヒワが同時に2個体観察されたことがあったので、北大構内に少なくとも2個体のコベニヒワがいたことがわかった。



写真2



写真3

日本でのコベニヒワの観察記録は、インターネットで検索すると、北海道や島嶼部を中心に観察記録が散見され、散発的に観察されているようだ。そのため、石狩地方でもコベニヒワの観察が記録される可能性は十分あるのだが、『石狩鳥報2008』（石狩鳥類研究会, 2009）には、観察記録はないことになっており、リストに名前さえ載っていない。これは、コベニヒワとベニヒワは非常に似ているため、識別が困難であるためと考えられる。それ故、ベニヒワの群にコベニヒワがいたとしても、観察者が見逃してしまっていた可能性が非常に高い。コベニヒワは識別ポイントを

押さえ、上記の特徴をベニヒワと見比べながら観察することで識別が可能である。カメラでの撮影も非常に有効であろう。しかし、注意すべき点もある。ベニヒワの模様には個体ごとにバラツキがあり、腰の白い個体や、胸の縦斑が目立ちにくい個体もある。実際、インターネット上の記録写真において、ベニヒワをコベニヒワと誤認したと思われる写真もみられた。また、ややこしいことにコベニヒワでも茶色みが強い個体がいるようなので、一点の特徴に絞るのではなく、上の識別ポイントを総合的に判別する必要がある。

北大のコベニヒワは、3月16日までは確認した。ベニヒワは4月30日現在、少ないながらもまだ確認できる。来

シーズンの冬はベニヒワの群が北海道にやってくるかどうかは不明であるが、もし飛来したのであれば、またコベニヒワを探したい。

写真2と写真3はそれぞれ北海道大学野鳥研究会の菟原佑樹氏と木村耕氏の撮影したものを使用させていただいた。また、コベニヒワの識別点に関しては、木村耕氏のアドバイスをいただいた。二人の協力に感謝したい。

#### 引用文献

石狩鳥類研究会 (2009), 石狩鳥報2008.

渡辺修治, 三河 一郎 (2004), 「考える識別・感じる識別」, Birder2004年1月号, 文一総合出版.

## 札幌市豊平公園でナキイスカ

広報部

北海道ではもちろん、全国的に記録が少ないナキイスカが今年(2009年)の3月16日に札幌市豊平区の豊平公園で、愛護会会員の赤沼礼子さん、田中志司子さんによって観察されたので紹介します。

赤沼さん、田中さんのお話によりますと、当日正午頃、お二人で鳥を見ながら公園内の緑のセンター近くを歩いていたところ、大きな5、6本のヨーロッパトウヒ(ドイツトウヒ)があるあたりの地面で水浴びをしたり、水を飲んだりしている赤い鳥がいたとのこと。そこには先にその鳥をカメラで写している人がいて、一緒に確認しながら、翼にある太い2本の白線や背中側の翼の先端にある白い斑紋などから、ナキイスカの雄に間違いはないということになりました。そのナキイスカと一緒にイスカの雄1羽と雌1羽がいたとのこと。ナキイスカは10分ほどでどこかに飛んでいってしまったそうです。

写真は、赤沼さんたちが行く前に、先にいた人(匿名希

望とのこと)が撮影したものです。掲載のご了解を得て後日いただきました。写真(1)と(2)に明らかなように、翼に太い白線が見えます。その前方にはもう1本の白線があるのですが、それは写真(2)でわずかに覗いている程度です。でも、お二人はそれもしっかりと確認したそうです。白線というよりは白帯といった方がいいかもしれません。背中側からの写真(2)には三列風切先端のかなり大きな白斑が明瞭に写っています。イスカの中にも希に翼に2本の白線があるものがありますが、ナキイスカに比べてずっと細くなります。

北海道でのナキイスカについては、名をあげるだけの発表や、イスカの誤認とみなされるものなどがあるため、正確な記録例数はあまりはつきりしませんが、かなり少ないことは確かです。イスカの群れに混じっていることが多いということですから、「翼に2本の白帯」の個体がいたら注意を払ってみましょう。



ナキイスカ (1)



ナキイスカ (2)

# ウトウという名の鳥

札幌市中央区 武 沢 和 義

## 1. はじめに

世阿弥の作品に『善知鳥』という謡曲(能)がある。善知鳥は、「うとう」と読み、ウミスズメ科のウトウを指すと理解されている。謡曲『善知鳥』の荒筋を簡単に紹介する。陸奥国の外の浜に旅する僧が、立山で地獄のような光景を見る。僧が下山すると、そこで一人の老人に出会う。そして老人から、外の浜で亡くなった獵師の妻子を訪ね、蓑と笠を手向けて供養するように伝えてほしいと頼まれる。実は、その老人は獵師の亡霊である。弔いを受けて獵師の亡霊は、僧の前で、生前の獵の様子と冥途での苦しみを語る。善知鳥は、親が「うとう」と呼ぶと、子が「やすかた」と答えるという鳥である。その獵師は、この習性を利用して獵をしていた。親は空で血の涙を流す。獵師は、手向けの蓑笠を付けて、それを防ごうとする。娑婆では「うとうやすかた」に見えた鳥も冥途では化鳥けちやうとなって襲いかかる。

これに関連して藤原定家の作とされる歌に「みちのくの外ヶ浜なる呼子鳥 鳴くなる声は うとうやすかた」がある。呼子鳥は万葉集にも詠まれている鳥であるが、どの鳥を指すのか諸説があつて不明である。中西悟堂は『「万葉集」中難解の鳥』で、古くはツツドリとカッコウは混同されていたとした上で、呼子鳥はツツドリかカッコウであることを示唆している。これらホトトギス科の鳥は托卵後、鳴き方を教えるために、雛が育つまで、その近くで鳴き続けるとし、これが「わが子を喚びつつ鳴くことになる」と述べている。親が「うとう」と子と呼ぶというのも、こんな感じなのだろうか。

また西行の歌とも言われる「子を思う 涙の雨の 笠の上に かかるもわびし やすかたの鳥」というものもある。「涙の雨の笠」は、謡曲『善知鳥』の中にも示されている。

外の浜あるいは外が浜であるが、これは陸奥国の北辺の浜を指す。津軽半島の先端近くに外ヶ浜町があるが、古くから外が浜と呼ばれていたのは外ヶ浜町から青森市にかけての海岸沿いの浜であった。青森港近くの安方町うとうという所に善知鳥神社というのがある。以前、この神社を参拝した時、社務所にウトウの写真が飾られていた。社務所の人に、何処で撮った写真かと尋ねると、天売島とのことだった。青森は江戸時代に入るまでは、善知鳥村と言われていた。善知鳥神社の辺りに、安潟という沼地があったようで、神社内には、その名残とされる池があり、「うとう沼」と呼ばれている。これらから、善知鳥は地名に由来する名と見ることができる。また、「やすかた」は安潟と関係がありそうだ。ところが、その地名自身がウトウの沢山いる所から来たともされる。

善知鳥と書いて「うとう」と読み、それが何故ウトウを意味することになるのか、ということは江戸時代から多くの人が、鳥名と地名の両方の立場から議論している。

滝沢馬琴は善知鳥の地名の由来については、突き出た岬、つまり出崎の意としている。これはウトウの嘴に付いている突起に喩えたと理解されている。浅虫温泉の近くに善知鳥崎がある。江戸時代の歌人・菅江真澄は、ここを訪れ有多宇末井と表記している。真澄は、鳥名、地名あわせて、「うとう」とは何かということ、とりわけ熱心に追及した人である。

「うとうまい」という地名はアイヌ語を連想させる。アイヌ語では、ウトウは突起という意味である。また、ウは場所を表す接頭語であり、トは湖沼である。従って沼のある所とする解釈もある。湖沼であれば、安潟のことと見ることができる。

## 2. 菅江真澄について

菅江真澄の意見に従って、善知鳥とは何かについて考えてみたい。菅江真澄は、三河国(愛知県)の人で本名を白井秀雄という。基本的には歌人であるが、多才な人で国学や本草学(薬学)についても詳しく、絵も描く。天明3年(1783)、30歳の時に故郷を離れて旅に出て、文政12年(1829)に秋田の角館で亡くなるまで一度も故郷に帰ることなく、主として東北・北海道での旅生活を続けた。そして数多くの旅日記や随筆を書き残しており、これらは『菅江真澄遊覧記』と呼ばれている。真澄の旅日記は、民俗学が誕生する以前に書かれたものであったが、江戸時代の東北・北海道の庶民の生活ぶりを民俗学的立場から記録しており、民俗学の祖とも言われる。

菅江真澄は、天明8年から寛政4年までの5年間、当時、蝦夷と呼ばれた北海道に滞在して、和人の居住地域の外にまで旅をしている。青森から蝦夷に渡ろうとしたのは天明5年のことである。しかし、海が荒れていて、いつ船が出るのか判らないと聞き、善知鳥神社に参拝して、その時期を占ったら、三年待てという結果が出た。この頃、天明の大飢饉の最中であり、真澄は、その惨状を津軽で見ている。そして自分も餓えるかも知れないと考え、占いの結果に従って、仙台領へと、旅先を変更する。そして三年後に再び北上して蝦夷地に渡った。この途中に、また善知鳥神社に詣でている。この二度にわたる善知鳥神社への参拝のことは、旅日記『外が浜風』と『外が浜づたい』に書かれており、この際に善知鳥のことを調べている。

### 3. 善千鳥、悪衛、うとうやすかた

最初に善知鳥神社に参拝した時に聞いた話として、真澄は「昔は、この浜には善千鳥、悪衛という鳥が多く群れていて、餌をあさっていたが、今はいない」と書いている。そして前から聞き知っていた「うとうやすかた」という鳥は、この善千鳥、悪衛だろうとしている。ここで千鳥と衛の字を使い分けているが、善と悪のどちらに、千鳥と衛がついても同じことと思われる。衛は、現在使われているチドリとは一致しないかもしれないが、少なくともチドリの仲間と見るのがいいと思われる。また、千鳥は知鳥あるいは智鳥とも書くので、善千鳥と書けば、必然的に謡曲『善知鳥』と結びつけることができ、「うとうやすかた」の名が出てきたのであろう。

善千鳥・悪千鳥というのは、千鳥と見る意見がある。例えば、善知鳥神社のホームページにも出ている。千鳥は、特定の鳥を指すのではなく、沼沢などに群れ集まっている水辺の鳥のことであり、『万葉集』などでは、百鳥、千鳥と表現されている。しかし、カモ類は、これらとは区別して扱われているようである。善千鳥が群れをなす鳥であることは、この節の初めに述べたが、真澄の日記には、幾度も説明されている。

千鳥の前についている善と悪の字は接頭語であるが、これは同じ意味の言葉と判断できる。葦の字は「あし」とも「よし」とも読み、植物のヨシを指す。元は葦であったが、「悪し」に通じるので、それを改め「よし」にしたとされる。ヨシであることを明示するときは葦の字が使われる。『万葉集』では葦原にいるカモやツルはそれぞれ「あし鴨」、「あし田鶴」と表現されている。同様に水辺に群れる鳥として「あし千鳥」もありうる。要するに葦原に群れる千鳥が善千鳥であり、それが善千鳥に変化したと見ることができる。

また、真澄は、村の老人の伝える古歌として、「みちのくの そとがはまなる うとう鳥 こはやすかたの 音のみぞなく」と「子を思ふ なみだの雨の 蓑の上にかゝるもつらし やすかたの鳥」他、一首の歌を、夜になって月を見ながら誦している。これらは、少し異なったところがあるが、前に挙げた定家と西行の作とされる歌をもとにしたものだろう。

二度目の参拝では、浦人たちから「<sup>うとう</sup>鳥頭大納言<sup>やすかた</sup>安方という方が流罪になって、この地で亡くなられ、その魂が鳥になって群れて鳴いている。この霊をまつたのが、うとう大明神である」という伝説を聞いている。古くからは、この人物の名が「うとうやすかた」の語源とされてきた。

### 4. つなぎ、しちり、ウトウ

菅江真澄は、善知鳥神社は二百年ばかり前に、今ある地に移されたが、その古い跡が残っていると聞き、草を刈っていた老人に案内してもらって、それを採しに行った。そ

こで真澄は次のような話を聞いている。二本木という所から「うとうの林」と呼ばれている辺りまで、昔は大沼があり、これを「うとう沼」と言い、「うとう鳥」が群れ住んでいた。ここに来て鳴いていた鳥は、今は「しちり」とも「つなぎ」とも言う。「つなぎ」には背に鍼はりのようなものがある、ウルメ、イワシなど、小さな魚を「ひしひし」と刺し貫いて餌をあさる。「しちり」は、七里の灘も磯部も見えなくなる程に多いので、そのように呼ぶ。あるいは、「しちり」と「つなぎ」とは別の鳥とも言われている。

ここに書かれた目刺し状態で魚を啜ってくるという「つなぎ」の採餌行動をみる限りは、これはウトウである。「つなぎ」については、菅原浩と柿澤亮三著の『図説鳥名の由来』にウトウと述べられている。この本によれば、松前広長の『松前志』にはウトウは「鼻鳥」とも「つなぎどり」とも言い、「水中にて魚をとりて、その鼻とおぼしきところにつなぎ出て其魚を食ふ故、かくなづけたるにや」と載っている。松前広長は松前藩の家老であったが、天明6年に引退して『福山秘府(松前藩史)』や『松前志』の編纂を行なった人物である。

平凡社から出ている口語訳の『菅江真澄遊覧記2』の注では、「しちり」はオオハムとなっているが、これには疑問がある。江戸時代には幾つかの鳥類図譜、つまり鳥の画集が出版されており、多くの鳥の絵が描かれている。これらの絵から鳥の名を同定したのが『図説鳥名の由来』である。これによると、堀田正敦の『禽譜』に「しちり」の絵が出ており、ウトウと同じウミスズメ科のケイマフリと同定されている。ケイマフリならば、ウトウと混同されたり、別種と思われたりしても不思議はない。

善知鳥神社の旧跡で、真澄は、若いころ渡鳥小島に漂着してウトウを殺して食って生き延びたという老漁師に会い、ウトウのことを聞いている。漁師の説明は「日が落ちて後、海から鳥に群れをなして帰ってくる。そして、地面に深く掘った穴をたどって、五月蠅さばえのように群がる。これを手脱いや小網の端で叩いて打ち落とし、あぶって食い、ようやく命をつないで松前に渡った。松前の沖合にはこの鳥が非常に多い」とのことであった。前半部分では、繁殖期のウトウの生態がよく捉えられていると思う。菅江真澄は、ここで初めて実在の鳥としてのウトウの知識を得たと思われる。

真澄は、ウトウと思われる絵も見ている。そして、善千鳥を描いた絵をみると、鴟の姿で色はたいそう黒く、くちばしは朱色で、足はうす墨に描かれている、と説明されている。頭はコガモやトモエガモと異ならず、眼のあたりに白い羽が斑に生えている」となっている。真澄は、トモエガモを「あぢむら」或いは味村と表記している。「あぢむら」は味鴨(トモエガモ)の群れのことであり、万葉集には「あぢむらの」という形で騒ぐにかかる枕詞として使われている。トモエガモは顔に緑と黄色の派手やかな模様

があり、コガモにもよく似た模様がついている。この絵は、どうもウトウとは感じが違うようである。むしろエトピリカに近いのではないだろうか。

菅江真澄は、老漁師から聞いた話によって、ウトウが穴に群がって巣を作る鳥であること理解する。そしてウトウという鳥の名の語源を考察している。空<sup>うつほ</sup>あるいは空<sup>うつつ</sup>洞になったものを「うとう」と言い、空洞になった木を「うとう木」と言う。ウトウは穴を掘って暮らす鳥だから、その名は、穴すなわち空洞からきたと考えた。真澄は『筆のまにまに』という随筆で、「うつほ鳥」というべきところを「うとう」と言ったとし、漢字として鴿を用いている。

南部の山里に行ったとき、乗っていた馬の足音が「とゞ」と踏み轟き、大きく鳴り響く所があった。その時、どうしてかと尋ねると、ここは「うとう坂」だから、このように鳴り響く、という答えが返ってきた。そして、あちこちに「うとう」という地名があると書いている。詳しい説明はないが、そこに空洞になった木があり、馬の足音が共鳴して鳴り響く、と言っているのだろう。

中西悟堂の『千鳥足談義』の中に、次のようなことが書かれている。千鳥足は普通には、酔った時に足元がふらつく歩き方を指すが、それだけではなく馬の歩行法に、千鳥足というのがあり、足音を踏み轟かせるように歩くというのである。真澄の言う、馬の足音もまた千鳥足であったとも理解できる。ちなみに、『広辞苑』で千鳥足の項を引くと、①として「馬の足並みがはらはらと千鳥の羽音のようであること」と書かれている。酔っぱらいの歩き方は②として載っている。この千鳥足という言葉を使った例が『太平記』に載っている。足利尊氏と対立して信貴山に籠っていた大塔宮護良親王が、建武の新政の成立によって、都に帰ってきた時、千鳥足を踏ませて小路を狭しと歩いたという話である。菅江真澄の説明を読んで、ふと気になったのは、「うとう坂」で馬の足音が鳴り響くという部分である。たまたま中西悟堂の著作を読んだことがあるものだから、「うとう」は千鳥かなと感じて、善知鳥＝ウトウの根拠を調べてみたくなった。

菅江真澄は、蝦夷を離れ、久保田(秋田)領に入った後も、善知鳥のことを考え続け、その結果を『善知鳥考』としてまとめたことが判っている。この本は未発見のままであったが、写本の一部が見つかり後藤宙外という人によって、その内容が昭和13年に秋田魁新報に掲載された。大筋は、これまでに述べてきたことと、あまり変わらない。しかし、『善知鳥考』の中では、ウトウの異名である「よなどり」にふれて、これは夜啼鳥<sup>よなどり</sup>であるとしている。また、根拠がよく判らないのだが、善知鳥は瀬千鳥のことで、これを「ちちり」と訛ったのに対して、善知鳥の漢字を当てたとも言っている。

## 5. まとめ

これまで、菅江真澄の意見に従いながら、補足説明を加えて、ウトウ＝善知鳥＝「うとうやすかた」という結びつきについて述べてきた。

大きくは二つの考えを書いた。一つは、善知鳥は善千鳥とか悪千鳥とも書くことができ、葦千鳥のことである。これはこれで一応の筋は通っているかと思う。今一つは、ウトウは空洞を意味する「うとう」が語源で、穴に巣を作る鳥のことであるとする。これも一理あるかと思われる。しかし、善知鳥とウトウの接点が、どうもはっきりしない。本当は、この説明が欲しいのである。

1節に挙げた歌が藤原定家と西行の作でなかったとしても、鎌倉時代には知られていた古い歌であったことは認めてよさそうである。これらの歌と鳥頭大納言安方の伝説を受けて、世阿弥の謡曲『善知鳥』が生まれたと考えられる。平安時代あるいは、それ以前から和歌に詠みこまれてきた有名な土地を歌枕という。しかし、詠み手が、その土地に行っているとは限らず、特に陸奥や蝦夷に関しては、その傾向が強い。外が浜も歌枕の一つである。

平安末期から鎌倉時代にかけては、外が浜の向こうにある蝦夷ヶ千鳥(北海道)が、中央の公家にとっても、おぼろげながら視野の中に入ってくる頃である。そして、室町時代になると、御伽草子『御曹司鳥渡り』などを通して一般に知られるようになる。『御曹司鳥渡り』は義経の蝦夷渡りの物語で、北海道を舞台にした極く初期の作品である。

歌枕としての外が浜の持つイメージとして、群れ飛ぶ千鳥があったと想像する。一方、室町時代に入ると外が浜で見られた鳥の群れの中にウトウが識別されてきたのではないだろうか。

4節に津軽から北海道にかけて、ウトウの方言として「つなぎ」があったことを述べた。だが、「うとう」という呼び名もあったことは間違いない。『野鳥だより』第146号に広報部名で「江戸時代中期の松前の鳥」を掲載した。これは、幕府に仕えた本草学者・丹羽正伯が各藩に領内の産物リストを提出させて編んだ『享保産物帳』に鳥のリストがあり、松前領の鳥について現在の種名と対応させようとしたものである。この中に「うとう」の他に「いとびりか(エトピリカ)」や「しかべ(アホドリ)」が含まれている。後ろの二つはアイヌ語である。従って、少なくとも江戸中期には、ウトウもアイヌ語名であったとの解釈が可能である。

そこで、室町時代に、群れる鳥を共通因子として、葦千鳥と「うとう」が混同して後世に伝えられた可能性は強いと思う。つまり葦千鳥＝善知鳥と鴿＝ウトウは、元は別の鳥であったが、それらが「群れる鳥」と「善知鳥という漢字」の解釈が原因になって生まれたのが善知鳥＝ウトウであったかと思う。以上のように考えてみたのですが、いかがなものでしょうか。

絶滅危惧種シマアオジをどう守るか (3)

シマアオジ

鳥の棲む風景とは？

北海道環境科学研究センター自然環境部 玉田克巳

2005年9月、兵庫県豊岡市で野生復帰の名の下にコウノトリが野に放たれた。放鳥式典では秋篠宮御夫妻がご臨席された。その後しばらくして紀子妃殿下ご懐妊のニュースが流れ、2006年9月に悠仁さまが誕生する。コウノトリが赤ちゃんを運んでくるというのはヨーロッパの言い伝えであるが、なにか不思議なものを感じた。

さて、今回は皇室の話ではなく、生息環境について紹介したいので、話を戻すことにする。野の鳥は野にいてこそ健全な姿である。だから野生絶滅した鳥が、いくら飼育下で増えても、野に放たなければ健全な姿とはいえない。しかし、野にいればどんな状態でも良いかといえそうではない。鳥が生きていくための生息環境が健全に保てていなければ野生復帰は望めない。野生復帰を前に、かつての生息環境が現存していなければ、その環境を復元していかなくてはいけない。まさに鳥が棲んでいた原風景が大事なのである。

それではコウノトリが棲んでいた原風景とは、どんな環境だったのだろうか。有名なモノクロ写真が残っている。1960年8月に撮影されたその写真には、川を渡る7頭の但馬牛、その牛を追うモンパ姿の女性、そしてそのまわりに12羽のコウノトリが写っている（コウノトリの郷公園発行の「いきもの通信No135」参照[http://www.stork.uhyogo.ac.jp/tsushin/tsushin\\_pdf/20081101a.pdf](http://www.stork.uhyogo.ac.jp/tsushin/tsushin_pdf/20081101a.pdf)）。この写真はコウノトリが棲む原風景として紹介されているが、このような風景は今の日本にはない。現代の農業は機械化が進んでおり、田起こしに牛馬を使うことはなくなっている。

ここで、コウノトリを野生復帰するにあたり、農耕馬や農耕牛を復元する必要があるかという点、そうではない。コウノトリが減少し、絶滅に向かった主な原因は農業である。過度な農薬使用が（当時の意識では決して過度とは考えていなかったと思うが）、生物濃縮によって、結局、高次の消費者であるコウノトリを絶滅の淵に追いやったのである。だから復元する必要があるのは、農耕馬や農耕牛ではなく、低農薬農業なのである。そして、コウノトリを放鳥した兵庫県豊岡市では、地域ぐるみでそれを実践し、コウノトリが棲める環境を復元し、放鳥にいたったのである。

それでは話をシマアオジに移していこう。野生復帰はないがシマアオジを守るためにも生息環境の保全は重要な課題である。ではシマアオジの棲む原風景、シマアオジが生きていくために必要な環境とはどんな環境なのだろうか。

2002年に北海道では夏鳥アンケートなるものを実施した。報告書作成にあたって、この分布情報から、ラフではある

が生息環境の分析を行ったので、今回は、この結果からシマアオジの生息環境について迫ってみたい（以下の内容は環境省自然環境局生物多様性センター2004からかいつまんだものである）。調査には本会の方々にも協力いただいたが、日本野鳥の会の道内各支部や野鳥観察をしている団体などを対象に、各会や支部の事務局から会員数の約1割を目安にして調査に協力していただける方を推薦していただき、合計257通の調査票を配布した。このうち169通を回収した。調査対象種はシマアオジのほかに、ウズラ、ヨタカ、アカモズ、コヨシキリ、ホオアカの6種で、1970年から2002年の約30年の間に生息を確認した記録をお寄せいただいた。

アンケート方式で得られた情報であるため、得られた情報件数を年代順に並べてみると、いずれの鳥も近年の情報件数の方が多い結果になり、必ずしも減少傾向が読み取れるものではなかったが、シマアオジについては1,202件の情報が得られた。この情報から描いたシマアオジの分布図が図1である（情報は5kmメッシュで収集したが、この図は10kmメッシュで作成した）。この連載の第1回目に、環境省が行った自然環境保全基礎調査の結果を紹介した。

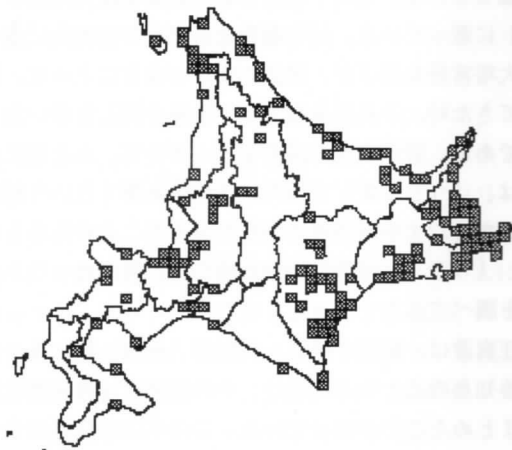


図1. アンケート調査に基づくシマアオジの分布

このときの1974～1978年の分布図（以下基礎調査の図とする）と今回の図を比べてみると、確認地点は今回の方が多いが、分布の傾向が似ていることがわかる。基礎調査の図は各メッシュ内の約2カ所で現地調査を行っており、このほか文献情報や聞き取りによって得られた情報を追加した分布図である。つまり文献調査などについては調査努力量が各メッシュで一定ではないもの、現地調査が行われているので、各メッシュ内を一定以上の調査努力が行われて



いる。一方で今回の分布図は、アンケートによるものなので、各メッシュの調査努力量は測れないし、一定でもない。しかし、両方の図が似通っているところが興味深い。

両方の図で空白になっている日高支庁管内や道南の渡島檜山支庁管内、道央部の大雪山系などでは、もともとシマアオジが少なかったことがうかがえる。アンケート調査に基づくシマアオジの確認地点の標高分布をみると80%以上が標高100m以下であった。道内の国土に占める標高100m以下の地域は約30%であるので、北海道は全体的に低標高地域が占める割合は多いものの、シマアオジはその中でもとくに標高の低い地域を好んで生息していることがわかる(図2)。

次に植生図を使って5kmメッシュ内の主要な植生タイプを調べ、シマアオジが確認された217メッシュの植生を割合ごとに示したのが図3である。農耕地が57%を占めているので、確認されたシマアオジのほとんどが農耕地で観察されたものと考えられる。大抵の図鑑にはシマアオジは草原に棲むと記述されており、牧草地でさえずっている姿を見かけた人も多いと思う。私は帯広畜産大学の出身で、卒業したのは20年以上昔であるが、学生時代は大学農場でシマアオジをずいぶん見たものである。私にとってもシマアオジの棲む原風景は牧草地というイメージが強い。

しかし、アンケート調査の結果をもう少しじっくりみよう。確かに調査結果からは、主要な植生タイプは農耕地ということになるが、北海道全体における農耕地の面積は23%もあり、かなりの面積が農耕地になっていることがわかる。一方で、道内に占める湿原の面積割合は、わずか0.6%であるのに対し、シマアオジの確認地点の5%が

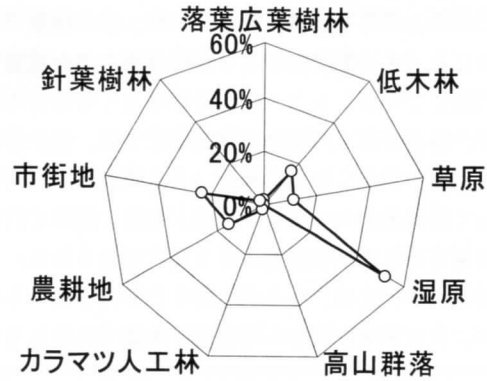


図4. アンケート調査に基づくシマアオジの生息環境評価

湿原であった。このことから、植生タイプごとにシマアオジがどの程度確認できたのか調べるために示したものが図4である。シマアオジが確認されたのは217メッシュであるが、このうち農耕地と分類されたのは123メッシュであった。一方で、全道は5kmメッシュで3,650メッシュあるが、このうち農耕地と分類されたのが846メッシュあった。123を846で割ると0.145...となり、シマアオジは全道の農耕地のうち約15%程度にいたということになる。湿原で同様の計算をすると52%という数字が算出でき、つまり道内では、湿原と分類されるメッシュにおいてシマアオジの出現頻度がかなり高い(高かった?)と考えることができる。言い換えると、シマアオジにとって、湿原は重要な生息環境であると考えられることできる。

もちろん湿原といっても、ミズゴケやツルコケモモが生えるような高層湿原もあれば、ヨシなどが占める低層湿原

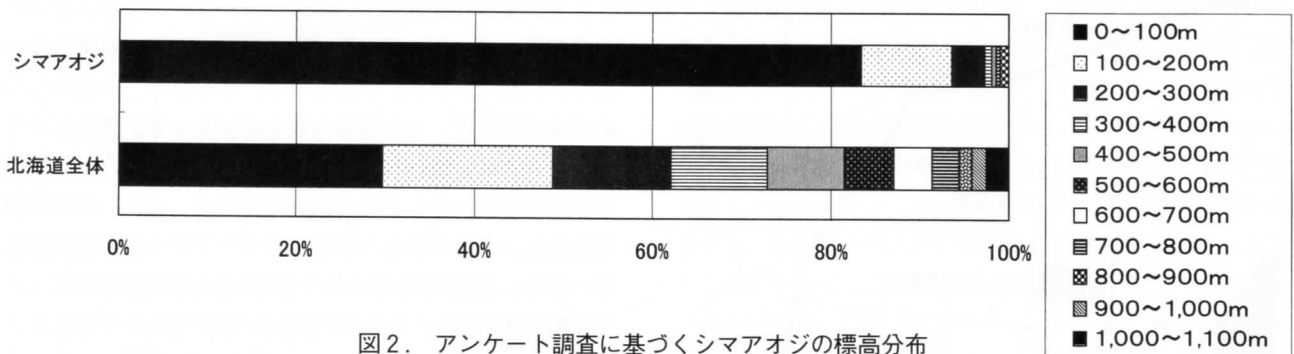


図2. アンケート調査に基づくシマアオジの標高分布

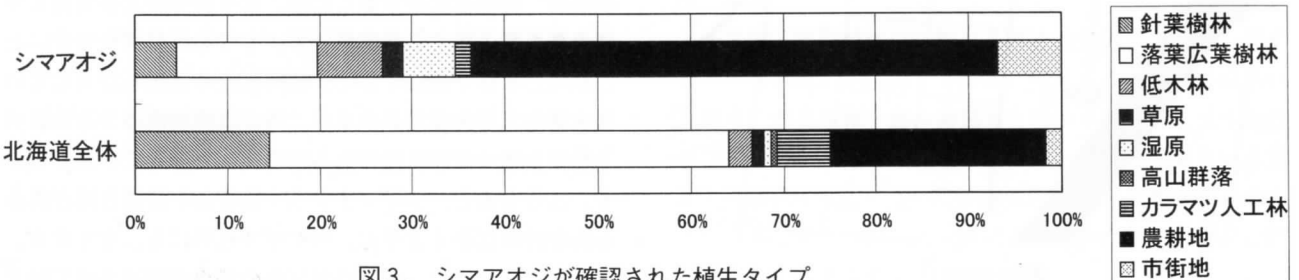


図3. シマアオジが確認された植生タイプ

などもあり、環境は多様である。今回のようなラフな分析では、これ以上のことは言及できないが、私の観察ではシマアオジにとっては低層湿原より高層湿原の方が重要であるように感じている。また、今回は草原としてまとめたしまったが、海浜草原と内陸部の自然草原では、植生学の見地からも、シマアオジの生息地という見地からも意味が違う。そして農耕地についても、畑地、水田、採草を目的とした牧草地もあれば、放牧地のような牧草地もある。生息環境の評価については、もう少し詳しい研究を進める必要があるが、シマアオジにとって湿原が重要であることは言

えそうである。湿原の重要性については世論も高く、ラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）を中心に保護の論議も高まっている。しかし湿原の重要性は、単に水鳥の生息地としてだけではなく、シマアオジの生息地という視点からも考えていくべきだと思う。

#### 文 献

環境省自然環境局生物多様性センター（2004）生態系多様性地域調査（湿原生態系調査）報告書、環境省自然環境局生物多様性センター、富士吉田。

## 探鳥地紹介 いしかり調整池

広 報 部

もう既に多くの方々が知っていると思われるが、「いしかり調整池」を紹介します。石狩市北生振地区（地図参照）にある巨大な農業用貯水池です。石狩川下流右岸側地域（石狩市、当別町）には水田が広がり、その灌漑用水は石狩川を水源としています。水を取り入れる地点が河口に近い（海に近い）ために、時には塩分濃度が上昇し、稲の生育に悪影響を及ぼします。そんな時には取水を停止するのですが、そうすると今度は用水不足（干ばつ）になってしまいます。これらを解消するために、北海道開発局札幌建設部札幌北農業事務所により造られたのが「いしかり調整池」です。石狩川の塩分濃度が許容値よりも低い時にたくさん貯めておき、取水停止時にはその水を回すことになります。なお、「石狩調整池」ではなく「いしかり調

整池」というひらがな標記が正式です。

調整池本体は2007年（平成19年）3月に完工し、その年の5月から湛水が始められました。約454m×334mの長方形で、通常時水深は3.3mです。これで50万立方メートルの水を貯めることができますということです。農業用水需要は8月下旬までなので、同月末頃には水が抜かれます。2、3日で水抜は済んで、巨大干渴の出現となります。

2007年と2008年の秋（9、10月）に見られた水鳥は、愛護会会員によって確認されたものとして、サギ類では、ダイサギ、コサギ、アオサギの3種類、カモ類（ハクチョウ類とガン類も含む）では、マガン、オオハクチョウ、コハクチョウ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、シマアジ、ハシビロガモの9種類、そしてシギ・チドリ類では、コチドリ、メダイチドリ、ダイゼン、トウネン、ヒバリシギ、オジロトウネン、ウズラシギ、ハマシギ、サルハマシギ、エリマキシギ、キリアイ、ツルシギ、コアオアシギ、アオアシギ、タカブシギ、イソシギ、ソリハシギ、オグロシギ、オオソリハシギ、タシギ、アカエリヒレアシギの21種類になります。会員ではない人によるものですが、ヘラシギの確認もあります。また、カモメ類も飛来し、かなり希なハジロクロハラアジサシも観察されています。2007年9月9日午前中には13種類のシギ・チドリ類が確認され、トウネンは約150羽が数えられました。加えて約200羽のコガモもいて、なかなかの壮観でした。

「いしかり調整池」は道央では数少ない“シギ・チドリの名所”的存在になりましたが、もう一つの大きな見ものは水鳥を狙ってくる猛禽類です。中でもハヤブサです。どこからともなく飛んできて、採餌したり休息したりしている水鳥たちを大慌てさせます。時には池周囲のコンクリート枠に止まったり、池の真ん中にデンと降りていたりします。こうなると、シギ・チドリを見ることはほとんどあきらめなければなりません。ハヤブサ以外にも、オオタカ、ノスリ、チュウビ、チゴハヤブサの飛来が確認されていま



周辺地図

す。ノスリとチュウヒはたまたま上空を飛んだだけかもしれませんが、オオタカとチゴハヤブサは狩りに来たみたいです。

ハヤブサが水鳥たちを飛ばしてしまった直後に行った人は不運です。何もいない干潟を見るだけになるかもしれません。でも、しばらく待っていれば、また水鳥たちは戻ってくるはずですよ。どれだけ待てばいいかははっきりしませんが。

正面ゲート（図中●の近く）の施錠は9月1日にははずされる予定です。留め棒をはずすと横に開けます。入るとすぐ駐車場があります。車の出入りの時以外はゲートを閉じておいて下さい。また、ゲート以外の道から車で出入りすることは避けて下さい。同じく9月1日からは管理棟のトイレも解放される予定です。とても立派なトイレです。

きれいに使うように心がけて下さい。管理棟内には愛護会会員による野鳥写真が少数ですが展示されています。時々入れ換えることもできますから、展示ご希望の方は連絡下さい。

最後に、これは愛護会の方々には釈迦に説法ですが、ゴミ等を捨てないように、また、落ちているゴミがありましたら、是非拾っておくようにして下さい。関係部局では周辺一帯を「農業・自然の交流ゾーン」として位置づけています。人工的な構造体とはいえ、鳥たちにとっては重要な場所です。「いしかり調整池」は石狩川浚渫工事に伴って一時的に造られた排泥池などとは違って、今後はほぼ永続的な水環境の場になると思われます。多くの皆様が良い環境で、たくさんの鳥を楽しめることを願っています。

## 平成21年度 総会 報告

日 時：平成21年4月10日(金) 午後6時30分～8時00分  
場 所：かでの2・7 320会議室

小堀煌治会長の挨拶のあと、議長に戸津高保氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決、承認された。

### 〈議 事〉

#### 1. 平成20年度事業報告

##### [総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催  
開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー  
開催期間：平成20年5月6日(火)～5月17日(土)  
出 品：14名、27点
- (2) 「野鳥だより」の発送(152号～155号)
- (3) 新年野鳥講演会、野鳥写真映写会の開催  
講 師：樋口孝城氏「石狩の鳥、北海道の鳥」  
平成21年1月10日(土)  
札幌市男女共同参画センター 4階大研修室  
参加者：84名(野鳥写真提供者6名)
- (4) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成・販売(80部)
- (5) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)
- (6) 傷害保険の更新

##### [広 報]

- (1) 「北海道野鳥だより」152号～155号の発行
- (2) ホームページの維持・運営

##### [探 鳥]

- (1) 探鳥会27回(1回平均31名)

##### [会 計]

- (1) 平成20年度決算報告
- (2) 平成20年度会計監査報告  
大野信明、村野紀雄監事から適正に処理されている旨の報告があった。

#### 2. 平成21年度事業計画

##### [総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催  
開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー  
開催期間：平成21年4月28日(火)～5月10日(日)
- (2) 「北海道野鳥だより」の発送(156号～159号)
- (3) 新年講演会、野鳥写真映写会の開催  
平成22年1月予定
- (4) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売(80部)
- (5) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)
- (6) 傷害保険の更新

##### [広 報]

- (1) 「北海道野鳥だより」156号～159号の発行
- (2) ホームページの維持・運営

##### [探 鳥]

- (1) 探鳥会27回(宿泊探鳥会を含む)

##### [会 計]

- (1) 平成21年度予算(案)

##### [その他]

- (1) 当会の今後を考え、会員増加対策や会のあり方などをフリートークで議論した。

[役員人事]

総務幹事の蒲澤鉄太郎さんと大町欽子さんが退任した。また、探鳥幹事だった佐藤幸典さんがご逝去・退任となった。総務幹事に新たに畑正輔さんが加わった。その他若干の担当変更があった。

[平成21年度役員]

顧問 谷口 一芳、藤巻 裕蔵、井上 公雄  
 会長 小堀 煌治  
 副会長 戸津 高保  
 監事 大野 信明、村野 紀雄  
 会計幹事 清水 朋子、横山加奈子  
 代表幹事 白澤 昌彦

幹事

(総務) ◎岩崎 孝博、品川 睦生、横山加奈子(兼)、  
 松原 寛直、畑 正輔、佐藤ひろみ(兼)  
 竹内 強、栗林 宏三(兼)、中正 憲佑(兼)、  
 (探鳥) ◎中正 憲佑、梅木 賢俊、門村 徳男、  
 栗林 宏三、後藤 義民、佐藤ひろみ、  
 田中 洋、富川 徹、成澤 里美、  
 早坂 泰夫、鷺田 善幸、松原 寛直(兼)  
 (広報) ◎樋口 孝城、高橋 良直、白澤 昌彦(兼)、  
 武沢 和義、道場 優、岩崎 孝博(兼)、  
 北山 政人、山下 茂、道川富美子、  
 戸津 高保(兼)

(◎印は各担当の代表者)

## 平成20年度 決算書

(収入の部)

項目	予算	決算	増減	備考
繰越金	413,138	413,138	0	
個人会費	572,000	530,500	▲41,500	
家族会費	99,000	123,000	24,000	前納、後納を含む
団体会費	10,000	5,000	▲5,000	
事業費	84,000	77,865	▲6,135	参加費、売上金他
寄付金	9,000	76,500	67,500	探鳥会支援謝礼他
雑収入	12,862	9,465	▲3,397	宿泊探鳥会余剰金他
合計	1,200,000	1,235,468	35,468	

(支出の部)

項目	予算	決算	増減	備考
印刷費	480,000	522,410	42,410	野鳥だより、封筒印刷費
通信費	130,000	80,864	▲49,136	野鳥だより郵送費他
会議費	40,000	43,690	3,690	幹事会、新年講演会
消耗品費	80,000	21,975	▲58,025	宛名シール、名札他
交通費	20,000	16,500	▲3,500	野鳥だより発送業務
報償費	55,000	55,000	0	事務所費用、講師謝礼
傷害保険費	25,000	24,900	▲100	保険料
雑費	30,000	45,510	15,510	写真展、香典他
予備費	240,000	0	▲240,000	
基金積立	100,000	100,000	0	
合計	1,200,000	910,849	▲289,151	

1,235,468 (収入) - 910,849 (支出) = 324,619 (次年度へ繰越)

## 平成21年度 予算書

(収入の部)

項目	本年度予算	前年度予算	増減	備考
繰越金	324,619	413,138	▲88,519	
個人会費	520,000	572,000	▲52,000	
家族会費	99,000	99,000	0	前納、後納を含む
団体会費	10,000	10,000	0	
事業費	80,000	84,000	▲4,000	参加費、売上金他
寄付金	10,000	9,000	1,000	
雑収入	6,381	12,862	▲6,481	
合計	1,050,000	1,200,000	▲150,000	

(支出の部)

項目	本年度予算	前年度予算	増減	備考
印刷費	490,000	480,000	10,000	野鳥だより印刷費
通信費	90,000	130,000	▲40,000	野鳥だより郵送費他
会議費	45,000	40,000	5,000	幹事会、新年講演会
消耗品費	40,000	80,000	▲40,000	事務用品他
交通費	20,000	20,000	0	野鳥だより発送業務
報償費	55,000	55,000	0	事務所費用、講師謝礼
傷害保険費	25,000	25,000	0	保険料
雑費	50,000	30,000	20,000	写真展費用他
予備費	135,000	240,000	▲105,000	
基金積立	100,000	100,000	0	
合計	1,050,000	1,200,000	▲150,000	

## 積立基金特別会計

(20年度収入決算)

項目	金額
繰越金	200,000
一般会計より繰入	100,000
合計	300,000

(21年度収入予算)

項目	金額
繰越金	300,000
一般会計より繰入	100,000
合計	400,000

会員数

	17. 4. 1	18. 4. 1	19. 4. 1	20. 4. 1	21. 4. 1
個人	349	321	316	286	271
家族	40	34	32	33	36
団体	2	2	2	2	2



**円山公園**  
2009. 3. 1  
札幌市東区 林 友行

家の近くの図書館で、並べられているパンフレットなどを見ていると探鳥会が目にとまり、なじみのある円山公園で開催ということから、このたび参加させていただきました。野鳥についての私の知識といえば、カラスやスズメがわかる程度ですので、不安を感じながら当日円山公園の集合場所に向いてみますと、すでに10名程度の方が集まっており、なごやかに談笑している様子から私のようなものでも入っていけるような雰囲気にはほっとしました。幹事の方からいただいた名札をつけ、はじめの方に立っていますと、近くにいた方が野鳥の鳴き声を録音した小さなボックスとイヤホンをつかわせていただき、さらに新参者に野鳥の説明をしていただける方をご紹介までしていただきました。そのうちに次から次へと参加者が増え、時間がきて探鳥会が始まりますと、私は先ほどご紹介された方のそばを終始はなれないようにして行動し、野鳥の見分け方などをおしえていただきました。ほんとうにありがたいことでした。参加者のなかに入れていただいて野鳥の姿や声を求めながら、円山公園内の雪道を散策しました。まわりがみな野鳥にとてもくわしい方ばかりという感じで少し気圧されてるような気持ちになりましたが、親切なご説明をいただいているうちに、何時のまにか一緒にとけこんでいくことができました。しかし、皆さんが遠くの樹木の枝に止まっていたり飛んでいる小さな野鳥をすばやく見分けるさまは、私にはおどろきでした。私と同年代で、視力だって同じような感じなのに、野鳥の観察力がこんなにちがうのは、きっと野鳥への深い愛情と長い期間にわたる努力と苦労が背後にあるのだらうと思いました。私はときどきですが、森林を散策しながら人々に樹木などについてお話するようなことは行なっております。そのような際に野鳥にあうことも多く、そういうときには少しでも野鳥の見分けができ、森林と野鳥のかかわりなどにも話を及ぼすことでできればいいのになと思うことがありました。このたびの参加にはこういう動機もありましたが、このたびの参加から、やさしく野鳥の知識を増やすことなどできることではないとわかりました。しかしながら、参加している方々のご様子は、とても幸せそうに野鳥との出会いを楽しんでおられましたので、私も機会があれば今後も参加させていただきたいと思っています。春になれば私のような者でもそれなりに出かける機会が多くなり、まじめに参加できないと思いますが、こんな我がままなもので許していただけるのであれば、仲間のすみに加えていただきたいと考えております。

【記録された鳥】トビ、アカゲラ、コゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ベニヒワ、ハギマシコ、ウソ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト  
以上25種

【参加者】荒木良一、井上公雄、今泉秀吉、今村三枝子、岩崎孝博、五十嵐加代子、石神直登・美代子、岡部良雄、河野美智子、川分恵子、栗林宏三、児玉 諭、小松正幸、坂井伍一・俊子、佐々木容子、サノ、品川睦生、白澤昌彦、高田征男、高橋きよ子、高橋良直、武沢和義、竹田芳範、タケナカ、田中志司子、田辺 至、辻 雅司・方子、対馬洋子、綱島詔雄・征子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、成澤里美、畑 正輔、林 友行、樋口孝城・陽子、平野規子、広木朋子、山田甚一、山本昌子、吉中久子、渡辺 借  
以上48名

【担当幹事】武沢和義、中正憲信

**ウトナイ湖**  
2009. 3. 22

【記録された鳥】ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、ノスリ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、ヨシガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ハクセキレイ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ホオジロ、カワラヒワ、マヒワ、シメ、ハシボソガラス  
以上28種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、石神直登・美代子、伊藤裕美、後藤義民、小林美奈子、小松正幸、坂井伍一、品川睦生、清水朋子、高橋良直、田中 洋・雅子、辻 雅司・方子、対馬洋子、道場 優、戸津高保・以知子、中嶋慶子、中正憲信・弘子、中村 隆・廣子、浪田良三・典子、成澤里美、蓮井 肇・敏恵・香・茜、浜野チエ子、樋口孝城、平野規子、広木朋子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、横山加奈子、吉田京子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸、渡辺 借  
以上46名

【担当幹事】品川睦生、鷺田善幸

**モエレ沼**  
2009. 4. 12  
札幌市手稲区 坂井 伍一

交通混雑を考慮し、早めに家を出たものの、わりと順調に走ることができ、集合時間約1時間前に到着してしまい、さてどうしようかと思案していたところ、徐々に会員の方

たちが集まりはじめ、集合時には、60名ほどの盛大な探鳥会となりました。

最高気温16度の天気予報とは裏腹に強風が吹き、肌寒く感じられる中、幹事さんから「風が強いため沼の内周を回ります」とのお話があり、早速コースに出ました。キンクロハジロ、ヒドリガモの群れを観察しながら、他にカモはいないかと対岸で寝ているハシビロガモを探しだすなど、この時期見られるカモ類をほぼ観察することができました。

ヒドリガモの中に、アメリカヒドリノ純粋種と交雑種があり、眼から後ろにかけての緑色光沢の鮮明さの違いなど比較しながらの識別ができ、また、三列風切が長く鎌状に垂れ下がり、ナポレオンハットのヨシガモの雄、それに寄り添う雌の姿も確認でき、有意義な鳥見をさせていただきました。

北大橋の上からオオバンノ姿も確認されましたが、昨年よりもずいぶんと少ない感じがしました。

繁殖期を迎えたアオサギが優雅に飛び回り、上空をノスリが強い風にも負けず、悠々と舞い、沼の土手には、渡ってきたばかりと思われるベニマシコの群れが地面の餌を採る姿が間近に見られ、大感激でした。オオジュリンの姿も見られ、いよいよ夏鳥の季節がやってきたことを実感し、鳥合わせ・昼食を採り解散となりました。

水陸併せて41種の野鳥が観察され、大満足の1日を過ごすことができました。

駐車場の開放、探鳥会の引率・説明をいただいた幹事さんに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

余談ですが、帰路立ち寄ったあいの里公園で、冬鳥のミヤマホオジロと夏鳥のルリビタキが同じ場所で採餌している場面に遭遇し、本当にラッキーな1日でした。

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、トビ、ノスリ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、ヨシガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ミコアイサ、カワアイサ、オオバン、カモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、キジバト、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ツグミ、キクイタダキ、ヒガラ、シジュウカラ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、イスカ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト

以上41種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、伊藤裕美、井上公雄、井上詳子、今泉秀吉、今村三枝子、岩井 茂、大橋 晃・悌子、景安則子、川東保憲・知子、北山政人、栗林宏三、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、小松正幸、小山久一、坂井伍一・俊子、佐藤ひろみ、佐藤優子、品川睦生、清水朋子、高田征男、高橋良直、高橋きよ子、田中 洋・雅子、辻雅司・方子、道場 優・信子、戸津高保、内木克己・靖子、長尾保秀・由美子、中正憲信・弘子、浪田良三・典子、西

尾京子、浜野チエ子、蓮井 肇・敏恵・茜・かおり、畑正輔、樋口孝城、平野規子、広木朋子、松原寛直・敏子・ゆたか、山本和昭、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子

以上63名

【担当幹事】北山政人、樋口孝城

## 宮 島 沼

2009. 4. 19

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、シジュウカラガン、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガン、カリガネ、マガモ、コガモ、カルガモ、オナガガモ、ミコアイサ、カモメ、アリスイ、ヒバリ、ハクセキレイ、モズ、ノビタキ、シジュウカラ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上28種

【参加者】阿部真美、今村三枝子、岩崎孝博、白田 正、川東保憲・知子、北山政人、小西峰夫・芙美枝、小山久一、品川睦生、清水朋子、高橋良直、田中 洋・雅子、谷 暎子、戸津高保・以知子、長尾保秀・由美子、中正憲信・弘子、浪田良三・典子、野村達子、樋口孝城・陽子、平野規子、松原寛直、村木、山本和昭、吉田慶子

以上32名

【担当幹事】岩崎孝博、田中 洋

## 野 幌 森 林 公 園

2009. 4. 26

札幌市清田区 後藤 義民

春らしくなって、軽装で出かけられると心待ちしていた野幌探鳥会。朝起きてびっくり、外は雪が降っています。こんな日に人は集まるのだろうか？

集合場所に付いてみると、数人が集まっていました。待つうちに二桁の人数になり出発です。やっぱり春はいいです。エゾエンゴサク、ミズバショウ、ザゼンソウ、エンレイソウ etc が遊歩道沿いに咲いています。

鳥たちは!?と云うと。カラ類、ケラ類の常連たちはほとんど顔を見せてくれました。昼食を取らずに大沢園地を過ぎ、しばらく行くと歩道上に一羽のわからない鳥。サア大変! 「アオジだ」「クロジだ」「茶色っぽいからミソサザイじゃないか」「尻尾が上がってないから違う違う」と騒ぎになりました。双眼鏡を覗いているうちにレンズは曇るし、天気が悪いので誰もプロミナを持っていません。そこでおもむろにH氏がカメラを取り出して写すことになりました。ふれあい交流館まで戻って図鑑と写真と見比べてみると、ナナなんと珍鳥。「カヤクグリ」です。

今日は寒い中少人数だったけど、大満足の探鳥会でした。



野幌森林公園 (4. 26) でのカヤクグリ 参加者撮影

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、トビ、ハイタカ、コガモ、マガモ、キジバト、ツツドリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、カヤクグリ、ルリビタキ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、ニュウナイスズメ、カケス、ハシブトガラス、ハシボソガラス

以上32種

【参加者】阿部真美、小西美美枝、後藤義民、清水朋子、田中 洋・雅子、蓮井 肇、早坂泰夫、松原寛直、松原敏子、横山加奈子

以上11名

【担当幹事】後藤義民、横山加奈子

## 藤 の 沢

2009. 5. 6

札幌市東区 宇田川有美子

私は、4月に兵庫県から来ました。これまで、野鳥を見に行くことが全くなかったので、集合場所に着いた瞬間、「こんな素人が参加して良かったのか…?」と感じてしまいました。しかし、みなさん温かく迎え入れてくれたので、楽しく参加することができました。

勤務している小学校には、毎日たくさんの野鳥が遊びに来ます。最初は、「鳥が来た!」と感動していただけでしたが、「何という鳥なんだろう?」と思い始めるようになりました。そんな時に今回の探鳥会に誘っていただき、参加するきっかけになりました。

出発して山の中に進むにつれ、たくさんの鳥の声が聞こえてきました。しかし、私には全く姿が見えません。先頭にいる方が双眼鏡を向けている方に目をやっても、そこに見えるのは木の葉っぱばかり。「やっぱり初心者にはそんな簡単に姿は見せてくれないのか…」とあきらめていた時、私たちの目の前にクマゲラが来てくれました。「今度こそ

私も見たい!」と必死で、私は双眼鏡を覗いて人のかき分けていました。そして私もやっとこの目で見る事ができました。大きな羽を広げて飛び立つ瞬間もしっかりこの目におさめることができました。もう大感激です!!

今回の探鳥会は27種類の鳥が確認されていましたが、私が確認できたのは「クマゲラ」「メジロ」「ヤマガラ」の3種類でした。数は少ないですが、私にとっては感動の3種です。野鳥のことは、まだまだ知らないことだらけですが、また機会があれば探鳥会に参加したいと思います。

【記録された鳥】トビ、マガモ、キジバト、コゲラ、クマゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、オオルリ、ハシブトガラ、コガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、クロジ、カワラヒワ、マヒワ、シメ、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス

以上27種

【参加者】秋本秀人、板田孝弘、井上公雄、岩井 茂、宇田川有美子、岩崎孝博、栗林宏三、後藤義民、小堀煌治、小西峰夫・芙美枝、小松正幸、清水朋子、高橋きよ子、高橋宣子、竹田芳範、辻 雅司・方子、戸津高保・以知子、内木克己・靖子、西尾京子、早坂泰夫、林 玲子、樋口孝城・陽子、平野規子、辺見敦子、松原寛直・敏子、盛本秀喜、矢島一昭

以上33名

【担当幹事】栗林宏三、小堀煌治

## 野 幌 森 林 公 園

2009. 5. 10

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、トビ、コガモ、マガモ、キンクロハジロ、キジバト、ツツドリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ビンズイ、ヒヨドリ、コルリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、サメビタキ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、シメ、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス

以上37種

【参加者】赤沼礼子、井上公雄、井上詳子、今村三枝子、牛込直人、栗林宏三、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、小松正幸、小山久一、坂井伍一、清水朋子、志田博明・政子、白澤昌彦、竹田芳範、竹中悦子、戸津高保、長尾由美子、浪田良三、成澤里美、野坂英三、蓮井 肇、早坂泰夫、平野規子、広木朋子、松原寛直・敏子、村上茂夫、盛本秀喜、山本和昭、山本昌子、横山加奈子

以上34名

【担当幹事】後藤義民、松原寛直



【サロベツ・ベニヤ原生花園】

2009年7月4日(土)～5日(日)の宿泊探鳥会です。案内は前号(第155号)をご覧ください。事前申し込み制で、定員は既に満たされています。

【野幌森林公園】 2009年7月12日(日)、9月6日(日)

野幌森林公園も7月と9月のとではそれぞれに異なる趣きがあります。緑いっぱいの7月半ば。鳥たちは繁殖をそろそろ終え、少し静かになります。キビタキやオオルリの声もまだ聞こえることがあります。カラ類などの馴染みの鳥たちも忙しく飛び回っています。巣立ちヒナが親鳥の後を追っている姿を楽しめるかもしれません。9月に入ると夏鳥たちは少なくなり、ちょっと寂しくなっています。見られるのは大部分が留鳥ですが、初秋の森林でカラ類などをじっくりと見るのも一興です。大沢園地で昼食をとり、大沢口に戻るのは午後1時頃になります。

集合：野幌森林公園大沢口 午前9時  
交通：JR新札幌駅発、夕鉄バス「大沢公園入口」下車、JRバス「文京台南町」下車 徒歩各6分

【石狩川河口】 2009年8月16日(日)、9月20日(日)

秋の渡りシーズンの前半と後半に石狩浜・河口で主にシギ・チドリ類を楽しみます。はまなすの丘公園ビジターセンターの前から浜に出て、河口まで1.6kmほど歩きます。シロチドリ、メダイチドリ、トウネン、ハマシギ、ミユビシギなどが見られます。ユリカモメやアジサシの群れにも会えるかもしれません。河口からは石狩川に沿って戻ります。夏、秋のはまなすの丘公園の植物も楽しめます。全部で4km弱の行程になります。シギ・チドリ類との出会いは運次第といったところがありますから、もしかしたら多くを見られないかもしれません。でも、海を見ながら砂浜を歩くのも天候さえ良ければ楽しいものです。正午近くに駐車場に戻ってから鳥合わせをし、センター内などで自由に昼食をとることになります。

集合：ビジターセンター駐車場 午前9時30分  
交通：札幌駅発中央バス7番石狩行 終点「石狩」下車、徒歩20分

【鶴川河口】 2009年8月30日(日)

鶴川河口付近の自然干潟や人工干潟でのシギ・チドリ類の観察が主目的です。シギ・チドリ類には当たりはずれがあります。近年ははずれが多い状態でした。でも時として

大当たりになることがあります。こればかりは担当幹事や参加者の日頃の心がけとは関係ないようです。シギ・チドリ類以外にもカモメ類が楽しめますし、河口周辺の草原では冬羽に衣替えしたノビタキやオオジュリンなども見られます。上空をチュウヒやオオタカ、そして、ミサゴが飛ぶことも希ではありません。当日の天候次第ですが、人工干潟付近で鳥合わせをし、自由解散となります。「四季の館」に戻って館内ロビーで昼食をとられる方々が大半です。館内には食堂や売店もあります。

集合：鶴川温泉「四季の館」駐車場 午前9時30分  
交通：札幌駅または地下鉄大谷地駅発、道南バス浦河行(ペガサス号)「四季の館」前下車

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り行います。

☆昼食、雨具、筆記用具をお持ち下さい。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465  
午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

鳥民だより

◆平成21年度野鳥写真展出展者・作品◆

- 荒木 良一 クマゲラ、タゲリ
  - 大橋 晃 ハチジョウツグミ
  - 小堀 煌治 ツミ、アカエリヒレアシシギ
  - 坂井 伍一 シマアジ、オオタカ
  - 品川 睦生 ヤマセミ、オシドリとマガモ
  - 新城 久 コミミズク、ハイタカ
  - 高橋 良直 マガン、アメリカウズラシギ
  - 田中 洋 イスカ、キクイタダキ
  - 田向 一彦 フクロウ2点
  - 中正 憲信 ミコアイサ、ミヤマホオジロ
  - 蓮井 肇 ハヤブサ
  - 浜野チエ子 オジロワシ、オオワシとオジロワシ
  - 宮崎 崇司 ハイタカ、ルリビタキ
  - 山田 甚一 キビタキ、ウン
  - 山田 良造 コゲラ、シロフクロウ
  - 吉中宏太郎 オオワシ、コウノトリ
- 以上 16名 30点

【新しく会員になられた方々】

- 中村 章彦 札幌市北区
- 大谷 光良 北広島市
- 井上 詳子 札幌市豊平区
- 松尾 幸雄 空知郡南幌町

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287  
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465  
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>